

令和 5 年 5 月 2 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02267

研究課題名（和文）ポスト民主化移行期における「想起の文化」 南米における「記憶」の変容

研究課題名（英文）"Culture of Remembrance" in Post-Transitional Era: Transference of "Memoria" in Southern Cone

研究代表者

林 みどり (Hayashi, Midori)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：70318658

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：ポスト移行期の南米地域において、軍政時代についての「文化的記憶」を生成させた想起の政治のダイナミズムと共同想起のメカニズムを分析した。ローカルな集合的記憶形成・共同想起だけでなく、ホロコーストを中心とするグローバルな記憶言説とローカルな記憶形成がどのように切り結び、再文脈化されたかに焦点を当てた。アルゼンチンの「記憶博物館」の表象戦略分析を行ったほか、芸術作品における政治戦略の理論的整理を行い論文として上梓した。また、文化的記憶を政治的資源に利用しつつ展開されてきた新たな社会運動の言説を分析し、精神分析的な知の文化が重要なアクターとして機能したことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民主化移行期には修復的正義実現のために集合的記憶形成は必要不可欠とされてきたが、ポスト移行期に入ると共同想起の「質」が問題になる。本研究では、これまであまり研究されてこなかったポスト移行期の南米社会において形成過程にあった「想起の文化」の内的ダイナミズムとその問題点を明らかにした。またグローバルな記憶言説との相互作用を分析し、「想起の文化」の「グローバル」な側面を解明した。さらにナショナリズムに収斂される記憶の正統性をめぐる言説を脱中心化する想起の営みの可能性を探り、記憶研究の新たな方向性を示した。

研究成果の概要（英文）：This research examined the dynamics of the politics of remembrance and mechanisms of collective remembering in the Southern Cone of Latin America that generated "cultural memory" of the military dictatorship in in post-transition era. Not only the local collective memory formation and collective recall were focused, but also how local memory formation was connected and re-contextualized articulating with global memory discourses (Holocaust, for example). Analyzing the representational strategies of "Museum of Memories", it also examined political strategies on Memory in works of arts. This study analyzed the discourse on the new social movements as well that have developed while using memory culture as a political resource, including local "psy" culture (as given cultural psychoanalytic tradition) and its discursive strategies.

研究分野：思想史

キーワード：記憶 共同想起 人権侵害 ポスト移行期 軍事独裁政権 ポピュリズム 集合的記憶 精神分析

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代半ば以降、ヨーロッパやアメリカ、日本を含むアジア地域など、世界各地で「記憶」、「忘却」、「想起」に関する研究や議論が、人文・社会科学の幅広い領域で活発に繰り広げられるようになった。軍政下での制度的暴力が「強制失踪」の形態をとったアルゼンチンやチリでは、記憶論はすぐれて政治的かつ学術的な論争の中心テーマとなった。被害当事者の生死が不明な「強制失踪」の場合、民主化過程におけるサヴァイヴァーや失踪者家族の記憶は、「汚い戦争」の「戦後処理」を実現する際の要諦となっただけに、集合的記憶の議論は、共同想起の営為をめぐる政治的・社会的・文化的な多岐にわたる問題領域を引き寄せたのである。

J・アスマンは *Cultural Memory and Early Civilization* のなかで、1980年代から90年代に記憶論が関心を集めるようになった理由を、「コミュニケーションを介して受け渡される集合的記憶」から「文化的記憶」(直接の語りを通してではなく公教育やメディア、記念碑等に媒介される集合的記憶)への移行が、この時期世界的に生じた点に求めている。背景には、この時期に戦争経験の記憶保持者に生物学的な死が訪れはじめ、直接的な接触(家族、地域社会等)を介して伝達・継承される「コミュニケーション記憶」が後退し、代わって記念碑や教育、メディアによる「文化的記憶」が前景化してきたこと、冷戦構造の崩壊により、それまで抑圧されてきた戦争記憶の抑圧機制が解除され、親密圏に限定されてきた「コミュニケーション記憶」の社会文脈化の圧力が高まったことがある。加えて「コミュニケーション記憶」から「文化的記憶」への移行は一樣ではないという状況がある。語り得ないトラウマ的経験の中に戦争被害の本質部分が埋没し、共同想起はおろか想起それ自体が「凍てついた記憶」によって妨げられるアポリアを抱え込む事態が生じるからである。

本研究が対象とするアルゼンチンやチリでは、民主化過程で人権侵害被害者の証言がメディアによって媒介され、文民政府下の文化政策のもと記録され記念碑化されることによって、「文化的記憶」への移行は加速度的に進行した。同時に、「コミュニケーション記憶」の保持者である人権被害関係者は高齢化しつつある。こうした一連の状況変化をうけて、本研究が取り組むのは、第1に、ポスト移行期に入った地域において、共同想起の営みが民主化の定着・深化に果たしてきた役割と問題点を再検討することにある。その過程で、集合的記憶の様態変化と社会の民主化の関係が本質的に有している問題性も明らかになるからである。

また本研究は、先のアスマンの議論を、同じく1980年代以降急速に拡大したグローバルな「ホロコースト言説」についてA・ヒュイツェンが提起した議論に、批判的角度から接続することによって、「想起の文化」の「グローバル」な状況に光を当てる。ヒュイツェンによれば、この時期にホロコーストをめぐる言説が大量生産・消費され、「ホロコースト」は世界各地の出来事を説明する際のアレゴリーとして用いられた。その結果、「ホロコースト言説」はローカルな歴史への洞察を妨げ、記憶を抑圧する事態に寄与してきた(*Present Pasts. Urban Palimpsests and the Politics of Memory*)。だが重要なのは、グローバル化した「ホロコースト言説」への参照を通じて、ローカルな「文化的記憶」がそれをどのように領有し、何が生成され何が隠蔽されたかを具体的に検証することであり、ローカルな共同想起がグローバルな集合的記憶といかなる関係を切り結んでいるかを、個別具体的な事実において明らかにすることである。この点に関連して、本研究が取り組んだのは、第2に、ポスト移行期社会における修復的正義や「文化的記憶」形成に、グローバルな記憶言説が果たした政治的機能(とくにポピュリズム政治との関係)を明らかにし、「想起の文化」の「グローバル」なダイナミズムを検証することであった。

## 2. 研究の目的

本研究は、1980年代の民主化移行期からポスト移行期に入りつつあるアルゼンチンやチリにおいて、軍政時代についての「文化的記憶」がどのような「想起の政治」のダイナミズムのなかで生成し、いかなる共同想起の実践として近年出現しつつあり、どのような論争の位相にあるのかを、アスマンの記憶論をはじめとする近年の記憶研究の成果を用いて解明する点にある。ローカルな集合的記憶形成と共同想起の営みを個別具体的事例において明らかにすると同時に、グローバルな記憶言説とどのように切り結び、言説の領有や交渉過程で何が生みだされ何が隠蔽されるかを明らかにする。また共同想起の営みにおいて、自己同一性に帰着するアイデンティティ・ポリティクスを批判的に照らし出す「想起の文化」のあり方を考察する。

## 3. 研究の方法

- (1)民主化移行期に着手された文化装置が、どのような過程で、いかなる議論を醸しつつメディアや教育現場で機能してきたかを、公共空間を中心に明らかにする。
- (2)人権組織やアドボケートの言説分析を通じて、ローカルな「文化的記憶」におけるグローバルな集合的記憶の領有様態と政治的機能を検証する。
- (3)共同想起の営為が陥りがちなアイデンティティ・ポリティクスを批判的に分析し、自己同一性に帰着しない想起の可能性を探るための理論的考察を進める。

#### 4. 研究成果

(1) アルゼンチンとチリは、歴史的・社会的な類似性と軍事政権期の政治的・経済的同質性において一括りにされることが多く、実際強固な同盟関係にあった1970年代の両国の政治・社会環境は親和性がきわめて高い。だが民主化過程に入ると、民政移管の時期が異なるだけでなく民主化への社会的コンセンサスをとる方法も異なり、制度的暴力に関する記憶の社会的な表出の仕方、加害者表象や被害者表象を含む軍政期の表象において際立った差異が生じている。それぞれの国において民主化移行期にどのような文化装置が、いつ、誰によって、どのような契機で企画され、いかなるプロセスを経て完遂され(または完遂されず)、何が記録され、または忘却され、何をめぐって争われ、公教育やメディアの社会实践のなかでどう想起されてきたか、またそれがグローバルな記憶言説(とくにホロコースト言説)をどのように分節化し領有したかを分析した。これらの成果は、学会報告「記憶を展示する：ポスト移行期における博物館化と想起」(日本ラテンアメリカ学会第38回定期大会、2017年)、論文「記憶の時代における想起の政治アルゼンチンの「記憶の場」と「記憶ミュージアム」(2019年)として発表した。

(2) 記憶ミュージアムにおいて人権アクターが担う歴史叙述が可視化される際、そこでなされる「歴史語り」はどのような「修辞」に拘束され、そこで導かれる「理解」のされかたには、いかなる問題点が表れているかについて分析した。具体的には、「ダークツーリズム」化を免れないブエノスアイレスの記憶ミュージアムの空間表象の分析を通じて、いわゆる「トラウマ論」の過剰な「使用」の問題点を析出した。展示にみられる暴力表象を不可視化することにどのような配慮がなされているかについて明らかにするだけでなく、証言の展示に内在する平板化・断片化がもたらす表象上の問題点を指摘した。これらの成果は、学会の部会報告「記憶ミュージアムの「語り」の構造」(日本ラテンアメリカ学会東日本部会、2019年)として発表した。

(3) 従来、ポピュリズム政治の政治戦略は政治学や社会学の領域を中心に論じられてきたが、ポピュリズム政治は集合的記憶を媒介する文化装置としても重要な役割をはたしてきた。とくにパブリック・アートにおいてそれは顕著である。従来、あまりなされてこなかったポピュリズムとアートの関係の問題点を腑分けすることは、折しも2019年にアルゼンチンに再び咲いたいわゆる「左派ポピュリズム」政権と記憶の政治の関係を明らかにするうえで重要であった。パブリック・アートとポピュリズムの関係を中心に分析した成果については、論文「ブレインストーミングとしてのポピュリズムとアート」(2019年)と、「再魔術化する時代 先端テクノロジーと現代ポピュリズムの交差点」(2020年)として発表した。

(4) 南米のポスト移行期を特徴づける政治現象のひとつとして、ポピュリズム政権による「想起の文化」の囲い込みをあげることができる。だが他方では、共同想起におけるポピュリズム的なアイデンティティ・ポリティクスに回収されない動きが草の根レベルで展開された点は見逃すことはできない。なかでも、非暴力による社会変革をめざす女性たちが主体となった「グローバル・サウス発の」新しいタイプのフェミニズム運動(#NiUnaMenos)と民主化運動の交差点において、共同想起の別の可能性を見いだすことができる。これらの新たなフェミニズム運動は、女性の身体への暴力を、家父長制とグローバル資本主義の結節点において分節しようとするものであり、その理論的なパースペクティブは、「五月広場の母たち」が展開してきた「想起の文化」をめぐる言説の地平において同期しうる。両運動が描きつつある「暴力の記憶」に関する惑星的カルトグラフィは、オフィシャルな「リコレクション」的共同想起とは次元を異にしている。こうした新たな社会運動に関する考察を、「身体・領土の潜勢力 五月広場の母たちから Ni Una Menosへ」(2021年)として発表した。

一方、一連のフェミニズム運動の理論枠のひとつとなっているイタリアのフェミニスト理論家S・フェデリーチに見られるように、新たなフェミニズム運動を現状分析に留まらない歴史的なパースペクティブにおいて捉え直すためには、女性の身体への介入の歴史的系譜を辿る必要があった。この点については、論文「越境する知と 心的なものの誘惑」(2020年)として発表し、近代医学による伝統医療・治療者の排除の力学を南米の文脈で明らかにした。

(5) 新たな社会運動を解析するにあたって、現状分析に陥らない思想史的な分析の可能性を模索する過程で、ポスト移行期における人権侵害の記憶の社会化とその機能に関するこれまでの分析を精緻化する作業を進めた。パンデミックにより現地調査が不可能になったことからやむなく着手した作業だったが、これが思いがけない収穫となった。新たに生まれたグローバルなフェミニズム運動がフィリエートする人権運動組織「五月広場の母たち」や、彼女らと共に「記憶作業」に従事した人権組織「ブエナ・メモリア」や「メモリア・アビエルタ」、制度的暴力を象徴する「記憶の場」の保全・管理・継承をめざす活動等々、ポスト軍政期の社会的記憶化には多くの精神科医や心理士が関与している点が明らかになったからである。これまで漠然と想定してはいたが、具体的に分析を進めるうちに、関連する社会運動や人権活動の言説には精神分析的なジャーゴンや精神分析理論が想像以上に流用され、また心理学や精神医学を知的バックグラウンドに持つ論者や活動家の割合が大きいことが判明した。アルゼンチンにおける社会的記憶化過程は、精神分析学や隣接する専門領域の知のアクターと切り離せないのである。これは他のラテンアメリカ諸国における同種の運動や思想と比較した際のアルゼンチンの顕著な特徴

ということが出来るかもしれない。この新たな発見については、論文「周縁 精神分析考  
アルゼンチン精神分析論のために」(2023年)として発表した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 林みどり	4. 巻 23
2. 論文標題 周縁 精神分析考 アルゼンチン精神分析論のために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 境界を越えて	6. 最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 林みどり	4. 巻 8
2. 論文標題 身体-領土の潜勢力 五月広場の母たちからNi Una Menosへ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 林みどり	4. 巻 下
2. 論文標題 越境する知と 心的なもの の誘惑	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 越境する宗教史	6. 最初と最後の頁 401-424
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 林みどり	4. 巻 -
2. 論文標題 再魔術化する時代 先端テクノロジーと現代ポピュリズムの交差点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ポピュリズムとアート	6. 最初と最後の頁 36-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 林みどり	4. 巻 -
2. 論文標題 ブレンストーミングとしての ポピュリズムとアート	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ポピュリズムとアート	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 林みどり	4. 巻 47
2. 論文標題 記憶の時代における想起の政治 アルゼンチンの「記憶の場」と「記憶ミュージアム」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ラテンアメリカ研究所報	6. 最初と最後の頁 55-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 林みどり
2. 発表標題 記憶ミュージアムの「語り」の構造
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会東日本部会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林みどり
2. 発表標題 記憶 を展示する：ポスト移行期における『博物館化』と想起
3. 学会等名 日本ラテンアメリカ学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------